

それはもう、青春そのもので、それでしかない。

語り手 塩田 一成 (高校十期生 外資系会社員)

聞き手 西井 綾乃

クラスを創り上げていった高校生時代

―高校二年生の劇がすごく思い出に残っているとのことだったので、その話について詳しく聞かせてくれませんか。

高校二年生の時は、今って文化祭って何。あ、西井さんは一年生やし、まだしたことないと思うけど、知ってる？どんなんしてるか。

―高校一、二年生は教室内装飾とかで、お化け屋敷とかの出し物です。

高三が市民ホールの劇。

―はい。そうです。

俺らの時は、高一、高二は全員その出し物とかじゃなくて、一律で決まって、劇をするんよ、教室劇を。一年生、二年生で教室劇をして、ステップアップして、最後三年生が集大成で市民ホールでやるみたいな感じやって。多分今でも、一・二年生でも劇をやりたいって言ったら多分やらしてくれると思うのね。でも、俺らはそれは一律で決まって、一年生の時は何の劇をやるかまで候補がもう決まってるんよ。三つぐらいあって、一と二と三があったら、一組と二組は一をします、三組と四組は二をしますみたいな感じでやって。で、二年生になったらそのテーマがなくなつて、自分らでほんまになんでもいい何か教室劇をやるっていう。

俺らのクラスが選んだのが、オレンジっていう阪神淡路大震災を題材にしたクラス劇で、多分今でも高校三年生の市民ホールの劇とかやった

ら同じやと思うねんけど、ピープルパールさんっていう、劇団さんがいて、その劇団の方に演劇指導とかをしてもらってたんよ。俺らがオレンジっていうのを選んだのは、そのピープルパールさんがやってたオリジナル脚本で、それをやることになりました。で、当時、自分がホームルーム委員長してて、ちよつと先にこれを見せたいんやけど、ちよつと準備してきました。四回公演するのね。計四回、二日間あるやん、文化祭って。で、一日目に二回で、二日目に二回、計四回やるっていうの。これが、二日目の最終公演が終わった直後の映像。一分ぐらいなんやけど、雰囲気伝わることかな。 (当時の動画を見せてもらう)―すごい。

高校生で俺はこれがすごい印象的やって、いわゆる思春期の男女が全員泣いてたんよ。クラス全員がね。で、それが四回あったけど、ほぼ毎回全員が泣くみたいな公演で。面白かった。楽しいよ。もちろん準備期間は楽しいけど。

でも、その、その四回目終わった時のこの雰囲気というか、この男女、その思春期の男女が、人目をばからず、全員が同じ時間を過ごして、うん、同じ理由で涙を流せるっていう、それはもう、いわゆる青春そのもので、それでしかない。もうそれ以下でもそれ以上でもない。ただただ青春やったっていう、そういう話なんやけど。

うん、何を話したらいいかな。結局、文化祭とかって、何のためにやるかっていうところを突き詰めたらやと思うねんけど、楽しかったねだけやったら、すごいレベルの低い文化祭やったと思うのね。でも、当時の自分らのクラスっていうのは、自負やけど、他のクラスの誰より、他のどの他のクラスよりも、この劇を通して、震災とかのことを伝えるっていうのもそうやし、自分たちがお世話になった人、先生とか、あと

はそういうピーパーさん、ピープルバーブルっていう劇団の人とか、あとは自分らの保護者もそうやし、当時は入場規制とかもあったから、教室に入るのに結構並んでもらったりもしたんやけど、そうやって並んでもらって、その上で来てくれはった人への感謝とか、そういう、なんというか、人に何かを、思いを伝えるっていう、その思いついていうのをすごい大事にして、それを劇を通して伝えるっていうところなんやけど。じゃあその先に何が待ってるかっていう話をする、結局文化祭ってクラス活動一年間ある中での通過点でしかないと思うのね。「文化祭が楽しかった。イエーイ。」で終わってたら、それってなんかあんまり意味がないものやと思う。ただただ楽しかった。

でも、この文化祭を通して、じゃあ最終的に三月迎えた時にどういうクラスになっていったかっていうのを常に自分は考えてて、そのための通過点の文化祭やったなと思ってる。で、結局一番自分が嬉しかったのは、この劇をやったこともそうなんやけど、三月になった時に、ホームルーム委員が主体となって、生徒アンケートみたいな取ったら、そこで、自分らのクラスの自己評価みたいなをつけるみたいな。クラスの平均点を出すみたいないろんな項目があって、うちのクラスの平均が高かったポイントが主に二つあって、ひとつが、学年平均が五点満点中、三・八ポイントっていう項目があって、それが、うちのクラスが四・九やったのね。それは、「先生から注意を受ける前に、みんなで日常生活を円滑に進められていた」っていう項目。もうひとつ、あと、うちのクラスが唯一満点やった項目があって、ひとつだけそれが全員が五点つけてるっていう、「互いに尊重し合い、支え合う仲間集団となっていた」っていう項目だったのね。で、これがすごい。僕はそのホームルーム委員っていう、そのクラスのリーダーをやってる立場としては一番うれし

かって。

—すごいすね。

うん、さっきの映像見てくれたらわかると思うけど、いじめとか、なんかそういうのが全く入る隙がない、そんないじめの「い」も入らないようなクラスやったのね。もう学校に来ればそれが家みたいなの。で、みんなが居心地のいいクラスやったし、そういうクラスを作れたっていうのを三月に一番実感できて、それが自分としては一年間そのリーダーというポジションをやってきてよかったなって思ったこと。なんかすごい話が長くなっちゃって申し訳ない。

—いや、すごいエピソードですね。

うん。だから、文化祭は、自分の中では立守での生活のなかですごい印象に残ってて、去年も文化祭来させてもらったし、今年も来ようかなと思ってるぐらい。

—やっぱそういう文化祭楽しむのも大事ですけど、青春とか。でも、文化祭を通した成長とかもやっぱ大事ですね。

うん。なんかそれが「楽しかったね。イエーイ」で終わったら全然意味がないと思うし。あとはルールを守るっていうのも、もちろんそうやし。ルールを逸脱していいものを作ろうと思ったら絶対作れると思うんですよ。抜け道を探ってるね。でもそれをやっていると、結局あいつらのとこいいもの作っただけルール破ってるやんって言われたらもう一発でおしまいやから、それがないようにしたかったし。俺らの時は絶対打ち上げ禁止やってん。その日に打ち上げやるってのが禁止やって。だから、結構行きたいっていう声は多かったけど、絶対うちのクラスはやるなってして、もうその日は絶対帰るっていう。それでもみんな守ってくれたし、最後までルール守るっていうのは、うん、なんかクラス全体として

一つになれたかなっていうとこかな。

―団結感も感じるエピソードですね。

高校二年生のクラスはなかなかいいんじゃないかと。

―ホームルーム委員などのリーダーをすることによってぶつかる困難の乗り越え方ってなんかありましたか？

まず、抽象的な話をするとう自分がこれまでのリーダー経験をしてきて一番大事だなんて思ってるのは、いかに周りのメンバー、クラスやったらクラスのクラスメイトやし、学年やったら学年の子たちをいかにやる気にさせるかだと思う。仕事でもそこはあんまり変わらんと思ってる。結局リーダーの仕事って、特にこの学校とかやったら、周りの子たちをやる気にさせて、同じ方向を向かせれば、持ってるポテンシャルは高いから絶対にいいものができる。

でも、リーダーが一人で突っ走ってしまおうと、何かこう、やる気を削ぐことをしてしまうとかすると、良くない方向にいくと思ってる。たとえば、文化祭に向かってやっていく中でも、もちろん文化祭には一生懸命なんだけど、日頃の学校生活で、「でもあいつがリーダーやしな」みたいな感じになっちゃうと、絶対人ってついてこうへんし、そうなるとなかなかいいものって出来上がってこないから。

いかに周りの人をやる気にさせるかっていうところで、自分がすごく心がけてたのは、全員と頻度高く喋るというか、コミュニケーションをよく取るっていうことかなと思ってる。特に高校生とか中学生とかやと、仲いいグループだったとか、特に女の子の子とかは、そういうのあったりとかあると思うねんけど、高校二年生の時は、自分は別に友達がいなかったわけじゃないけど、あえてそういうグループには入りたくなくて。自分はそういうポジションにいるし、みんなと喋っていいか

ら、いろんな子たちとコミュニケーション取るようにしてたし。あとはもちろんクラスやから合う合わへんっていう子もいると思うよね。性格的に。でもそれってただただ、なんていうのかな。一個人の感情であって、クラス活動としてやっていくには、そこは排除しなければいけない部分やと俺は思ってる。だから、みんなとなるべくコミュニケーションとって、あいつが言うんやからやってあげようとか、あいつが言うんやからそっちに行こうぜみたいな、そういう雰囲気になるようにしてた。

で、困難なことは別に特になかったんやけど、リーダーとしてのその話の文脈でいくなら、例えば球技大会をやるときに、僕らの年代ではそんななかったものをゼロから作るみたいなことがなかったのよ、前例が。だからもちろんできるん？みたいな感じやったけど、いや、でもそれはやろうぜっていう話になって。

そんな時にすごい思ったのは、自分一人で動いても意味がないっていうところで、いかに周りを巻き込んで、どんどん、どんどん仲間を増やして、人数を増やして、声を大きくしていつて。で、全員で一緒の方向向かっていくっていうことかなと思ってる。

当時で言えば、そのホームルーム委員会、各クラスのホームルーム委員をまず巻き込んで、で、関係各所、例えばやけど、体育教官室に行って、交渉をして、球技大会の意義から全部自分たちでまとめ上げて、体育館の使用許可だったとか、あとは、もちろんカリキュラムはもう最初に決まってるものやから、そこに横入れさせてもらうわけやし、学年主任とかにも話もしないといけないし。そういうのを自分一人でやるんじゃないくて、いろんな子たちを協力してもらって、みんなで一緒にやっていくっていうことをすれば、一人じゃできないこともみんなできやればできちゃうよねみたいな、簡単に言うて。そういうやり方をすごく自分

はしてたかなって思う。

―私が入学して感じたことなんですけど、中入生と高入生で最初ちよつと、壁みたいのがあったんですけど、当時もありましたか？

あった。俺らの時はがつりあったと感じる。西井さんも高入生やんな。

―はい。

俺も高入生やったから、あえて言葉を変えずに言うとか、なんか「ザ・中入」っていう感じやって。中入が牛耳るじゃないけど、中入が中心になってる雰囲気が出たあつて、それがめっちゃ嫌やって。絶対俺が高三になった時に自分が引く張るからなっていう思いはすごい持ってた。

―そうなんです。高2のクラスでは、団結力のあるクラスだったと思うんですけど、どうやって打ち解けたんですか。

ぶっちゃけ担任の先生との相性がめっちゃよくて、馬が合うっていうのもあったし。で、あとはすごい任せてくれたのね。生徒主体に、先生がいい意味であんまり介入しないようにしてくれてたと思うんよ。多分先生も先生で。それは、今はどうか知らんけど、当時は結構ハードルの高いことやったと思うし。任してもらってるから、しつかりやらないとっていうのもあるしっていうので、そこが原動力になった部分もあったかな。打ち解けていったっていうのは、やっぱり自分の中ではその文化祭っていう一個のその行事を通してっていうのが大きくて。

ちよつと質問の答えと反するかもしれんけど、部活してるやんな。

―はい。

部活とか外部のクラブでもいいねんけどクラス活動とは全く別物やと思つて。何が違うかっていうと、部活って例えば吹奏楽部やったら

「今の目標は何ですか」って聞かれたら答えられる？

―はい。

それって全員で共有してる？

―してます。

できるやんな。なぜなら、入った時からみんなと目標が共有しやすいよね、部活って。クラブ活動とかもアメフトとかでもなんでもそうやけど、全国一位になるぜ！みたいな。そのある程度同じ志を持ったメンバーが部活とかって入ってくるやん、最初から。だから、同じ方向を向きやすいんよ、その同じ目標に向かって。でも、それって別に簡単だよなっていうの、その、組織活動としては。

でも、クラス活動って、今どうやってクラスの仕組みが決まんのかわらないけど、俺らの時は、大人たち、先生たちが生徒の知らないところでクラスに入れて、生徒たちは大人に勝手に決められた箱の中で、どこ誰か知らない人たちと一年間過ごすわけやん。そうした時には、部活とは違ってクラスでは、目標がバラバラなんよな。

ある子は勉強すごい頑張りたいかもしれんし、ある子は部活をすごい頑張りたいかもしれんっていう風に。それを、例えば文化祭とか体育祭でもいいねんけど、そういうある一つの行事を通して一緒に何かを作り上げるっていうことで、目標がバラバラやったのが、一緒の方向を向いてくることがあると思う。それができた時に感じられる感情だったし、うーん、達成感とかっていうのがさっきの動画に現れてると思う。それを同じ方向に向かせる過程で得られる努力の仕方とか、雰囲気作りとか、そういうものは絶対にクラブ活動とか部活では味わえへんものやと思うのね。だから、すごい俺はクラスが大事だよなっていう風に思つてて。そこがクラス活動の醍醐味というか、一番面白いところ。最初か

ら目標が違うメンバーが集まって、その子たちが何かを通して同じ方向を向いて一つになっていく。そういうところでリーダーをやるっていうのもすごくいい経験やなと思ってた。

―確かにクラスってよく考えると深いですね。

＊

グローバルな学びを活かして

―国際関係学部に行ったきっかけって何ですか？

自分は高一、高二の時にこうと思ってた学部とは違うところに行ってた。元々、文学部の国際コミュニケーション領域ってところに行きたいなと思ってて。もしくは、経営学部の国際経営学科っていうところに行こうかなと思ったんやけど、高三で進路選択する時期になってきて、当時担任の先生に「いや、絶対一成は国関（国際関係学部）に行った方がいい」って言われたことがきっかけで、国関に行くことにしたけど、すごい正解だなと思った。

―どんな学部なんですか。

国際関係学部っていう学問を学ぶ学部なんやけど、簡単に言うとな英語を使って何かを学ぶっていう学部やと思ってくれたらいいかなと思って。学部紹介みたいになっちゃうけど、例えば文学部の国際コミュニケーション領域やったら、英語を学ぶとこだと思うね。国際経営学科は経営学部の経営学と英語を学ぶみたいな学部だと思って、対して国関は英語で何かを学ぶっていう、英語を使うことが目的じゃなくて手段になってるから、使うイコールできない無理やん？だから当時は一番レベルが高くなった。

あとやっぱり、自分がグローバルコースっていうところにいる、どう考えても英語使えないとこれからの社会ではダメだねって思ったところ

ろがあつて。自分が普通にシンプルに英語が好きっていうのもあつたし。あとは、日本だけで視点を持っても狭いと思ってて。

やっぱ、世界に目を広げた方が物事の価値観も広がるし、日本で正しいとされてる価値観が、実は海外ではそれは正しくなかったりするけど、でも、あたかも日本ではそれが絶対正しいっていう風に言われてたり。でもそれって、なんか自分の生き方として、すごい狭いところだけで生きてる気がするなって思ってた。それやったらもっとね、視野を広げるといいうか、選択肢を広げるみたいな意味もあると思う。

っていう意味で、その国際的な観点を学べる場所、かつ、それを英語を使って学べる場所だったから、そこに行っちゃったっていうか。

―海外というより英語が好きだった感じなんですか？

うん。海外も好きやったけど、英語を使ってたっていうところに自分は結構魅力を感じた。

―今日はありがとうございました。

【感想】

文化祭などのクラス活動でしか得られない青春と、クラスで団結したエピソードに感動した。私はまだ、「これこそ青春だ」と感じる出来事には出会っていない。だが、このインタビューを通して「青春」は誰もが通るようなイベントや出来事に隠れていること、自分で青春のかげらを掘り起こすことで一生の思い出になることを学んだ。また、クラスという集団の難しさと、クラスで団結して何かを成し遂げられることの素晴らしさを知った。これからは、クラスメイトたちの性格や得意なことを理解し、たくさんの人に気配りできるような人になりたい。

（次ページへ）



右：聞き手 西井 綾乃
左：語り手 塩田 一成さん